

# 技 が輝く

古くから文化の中心であった京都府では、国指定「伝統的工芸品」が全国最多の十七品目に上ります。その中でも、よく知られているものの一つが、京焼・清水焼です。

京都の焼き物づくりの起源は定かではありません。旧史によれば、五世紀前半の雄略天皇のころ、現在の



今橋弘明「金彩稲穂蓋物」

上絵付作業



宇治市及び伏見区の陶工に御器を作らせたことがあったようです。その後、僧行基が詔により窯を築き、それが現在の五条坂（茶わん坂）付近にあったと言われています。それから時代は移り、江戸時代の始めごろから、茶の湯の普及を背景に京都市内各地で陶磁器が焼かれるように

## 京都府

# 京焼・清水焼

なり、広く京焼と呼ばれるようになりました。

京焼の長い歴史の中で、特筆される名工は野々村仁清です。仁清の華やかな色絵陶器は多くの窯に影響を与えました。京焼全体の作風を、それまでの「写しもの」と呼ばれる茶器製造から、多彩なデザイン「色絵もの」に変えるほどのインパクトでした。その後、やや遅れて登場したのが尾形乾山です。琳派を生み出した兄・光琳の絵付けしたものに乾山が書を寄せるという共同作業で、数々の名作を残しました。

江戸時代の中ごろになると新しい京焼のムーブメントが起こります。奥田頼川の出現により本格的な磁器の焼成が始まりました。頼川は京焼の世界に磁器という新しい波を持ち込んだだけでなく、多くの優れた弟子を育てました。中でも、青木木米は乾山や仁清と並び、「京焼三名工」とたたえられます。頼川の磁器製法を学び、芸術性の高い作品を多く制作しました。

西村徳泉「祥瑞写腰掬水指」



京焼の中でも、東山地域を中心に焼かれたものは特に清水焼と呼ばれましたが、現在では京都市東山区・山科区の清水焼団地・宇治市の炭山などで生産されているものを総称して京焼・清水焼と呼んでいます。

明治期以降は近代的生産手法の導入とともに生産量も増加、日本の重要な輸出品となりました。以後、製造工程の効率化や環境に配慮した設備への転換など、社会のニーズに応じて変化しながらも、多品種・少量生産を特色とする高品質で芸術性豊かな陶磁器の伝統を、現在に至るまで守り続けています。

お問い合わせ

京都陶磁器協同組合連合会

TEL 〇七五―五三一―三二〇〇